

遠い島の友へ……

混声合唱とピアノのために

text: 李静和

(2005)

高橋悠治

合唱連盟「虹の会」委嘱

序

(語り)

女声：
遠い島の友へ…… Li Jeong-hwa
(李静和)

男声：
Yun Dong-ju 「たやすく書かれた詩」
(尹東柱)


女声：
朝鮮半島の南にある濟州島。
島全体を包むように島の真ん中にある山、ハンラ山(1980m)には
島の人の背より遙かに高い、太いススキの森があり、
海から風が吹くと、錆付いた鉄のぶつかる音を出しながら揺れ動く。
その風景はまるで巨大な波のようだ。

男声：
濟州島4・3事件。濟州島4・3蜂起ともいう。
一九四八年四月三日、ハンラ山の峰々をつたう烽火(のろし)があがって以来、
六年六カ月も続いた島ぐるみのパルチザン闘争、
血みどろの事件である。
その間、
「島内の七万五七〇〇戸の家屋のうち
一万五二二八戸が焼き払われ、
八万六五名が殺傷」された
という記述があるが、
タブー視されてきた4・3事件の真相については
まだ不確かな部分が多い。

遠い島の友へ……

混声合唱とピアノのために
text: 李静和

Piano



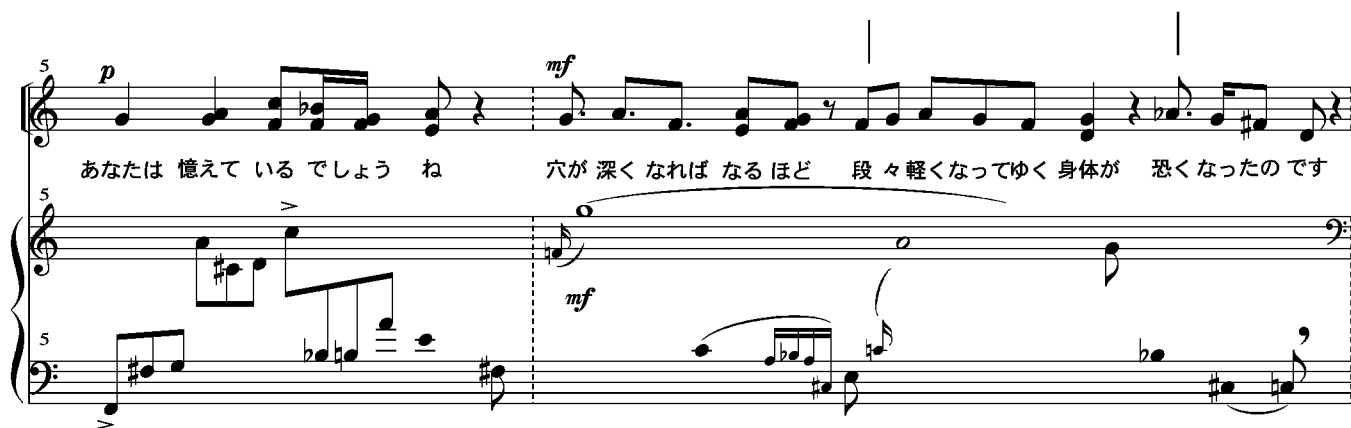
女



あなたの居る島にも ススキに 乗せられたあの かせが 吹いているのでしょうか



いくら みみを塞ぎ 身体を 縮めても す ーつと 胸の中に 穴を掘ってしまうあの風を



あなたは 憶えている でしょうね 穴が 深くなれば なるほど 段々 軽くなってゆく 身体が 恐くなったのです

Piano



9 *mf*

女

遠いある日 あなたもそう 思ったのでしょうか 私は いまこうして 昔 あなたが 移って来たところに 居ります

Piano

mf *p*

11 *f* *mf*

男

ま ———— ど の そ と に は る さ め が さ さ や き

f *p*

14 *mf* *p*

六畳部 屋 は ひ と の く に 詩 人
(他人)

f *p* *f*

17 *mf* *mf* *sub.p*

と は かなしい天 命 と 知 り つ つ も 一 行 の 詩 を 書 き と め て み る か

p *f*

20

20 *f*

f (尹東柱)
23 Yun Dong-ju *mf* た や す く 書 か れ た 詩

Yun Dong-ju

haneul gwa baram gwa byeol gwa shi
(空と 風と 星と 詩)
(語る)

mf ha - neul gwa ba - ram gwa byeol gwa shi

23 *mf*

23

女

25 *mf*

25 *f* *p* *mf*

あなたは ある日 こう 言いまし た

男

27 *mf*

私は 世界観— 人生観— この ような より 大きな 問題 より

27

27

28 *mf*

風と雲と光と木と友情

p *mf* *p*

かぜとくもとひかりと木と友情 そのようなことにもっと苦しんで来たかもしれませんと

女 30 *mf*

島の人達は白い森になって山を取り囲んでいる ススキを畏れていました 小さな島の殆どの人が死んでいた

Piano 30 *mf*

32

その日以来 その魂は 島を離れられなく ススキになり いつも

32

34

島をさまよっていると信じていました かつてふねにのって 島に帰れなかった人々を懐い

34 *mf*

36

遠い海にはもうひとつの島が在り 彼らはなんの苦しみのないあの島に

36

38

いるのだと 語っていた 島の人達は 山に埋められた 兄弟 達 さえも 忘れようとはしなかったのです

39

海の 向こうには hwan-sang eui seom i - yo-do 山の 土には ススキの 塊

幻像の 島 イヨド

43

風と 一体に なって いつまでも 島に 付き纏う 魂 [語り] 魂 その島の ことを もう一人の 友人は

47

ba - ram tha-neun seom と よんで いました う み か ら 帰 っ て く る か ぜ が

51

山の ススキを 抱え こむ ときは いつも 汗に 濡れた 濃い 人の 匂いが していました

54

か え り み れ ば お さ な と も だ ち を

男

Piano

56

ひとり ふたりとみな うしない わたしは なにをねがい ただひとり

58

おもいしずむのか 人生は生きがたいものなのに 詩が こう

60

たやすく書けるのは 恥ずかしいことだ

女

62

風のないところ 風の匂いがしないところへ 行きたかったのです そして

64 *mf*

さびしいときは くさばひとつも いとおしい

p

64 *mf*

67 *p*

空 いっぱい スモッグ のなかに いまも 生きている 大地

そら いっぱい スモッグ のなかに いまも 生きている 大地

mf

67 *mf* *p* *f*

70 *mf*

あ - すずめ ささやき いまも はな が さき そらには しろくももながれる

mf

70 *mf* *f*

73 *p* *f* *mf*

男 アパートに かがみすわり 虚空すこし ながめられ わたしの生—いまは よろしい

76 *mf* *p* *mf*

と 咳いてみたいです そして

p *p* *pp*

ありがたい なみだくむ Kim Ji- ha (金芝河)

79 *p* *mf* *sub.p* *mf*

ほんの少しでもいから 短い線のあるあの手に ながい やわらかいあのみに

mf *p* *mf*

女

81 *p*

堅い横骨のある いとおしいあの裸足に さわりたいと思うのです

p

83 *mf* *f*

他ではないこの空間で

p

六畳部屋はひとのくに (他人)

f

85 *mf*

まど のそとに はるさめが ささやいて

mf

87 *mf*

いるが あかりをつけてくらやみを すこし追いやり 時代の

87 *mf* *mf*

90 *p*

わたし

90 *mf* *f* *mf*

ように おとずれるあさを待つ 最後のわたし わたしはわたしに

90 *f* *mf*

93 *mf* *p*

なみだと なくさめ

93 *p* *mf*

小さな手をさしのべ なみだとなくさめ でにぎる 最初の握手 Yun Dong-ju (尹東柱)

93 *mf*

96 *mf* *p*

そのとき あなたは 傍らにいて わたしを 見守ってくれます か すると わたしは

98 *mf*

どんなに ほそ い しずかなかぜ にも 身を託し いつ も のように 眼 を 閉じ る と

100 *p* *mf*

微かなひかりの ようなふるえが 遠く から おとずれ やがてあのふるえは

102

ヌルイ優しいみず になり わたしのからだの すみずみをわたって もう 深いむねのあなに

105 *p*

そーつ と 包み 抱 いて くれ る だろ う ね
(いだ)

p

し ず か に い る

107 *mf*

し ろ い み ず が ゆ き に な り

mf

と か ら だ に み ず が 沸 く

109

そ ら に か か る

p

Ji-ha nun mul
(芝河) (涙)

mf

f

p

112 *p*

ふ と 気がつくと どこから か あの かげ が ススキの 森の 中 に 自らの 殺した 島の 人々 と一緒に 眠っている

112

113 *p* *pp*

父 の 影をのせ 吹いてくる のです 消え去ることのない 記憶

pp

113

p *pp*

115 *pp*

痕跡 [つぶやき] *ppp* その塊

ppp その塊

遠い島の友へ…… 尹東柱「たやすく書かれた詩」

李静和

あなたの居る島にもススキに乗せられたあの風が吹いているのでしょうか。

いくら耳を塞ぎ身体を縮めても、すうーっと胸の中に穴を掘ってしまうあの風を、あなたは憶えているでしょうね。穴が深くなればなるほど段々軽くなってゆく身体が恐くなったのです。かぜのないところに行きたいと思いました。

遠いある日あなたもそう思ったのでしょうか。私は今こうして昔あなたが移ってきたところに居ります。

窓の外に春雨がささやき
六畳部屋は他人（ひと）の国、

詩人とは悲しい天命と知りつつも
一行の詩を書きとめてみるか、
……
……
……

（尹東柱「たやすく書かれた詩」『空と風と星と詩』）

あなたはある日こう言いました。”私は世界観、人生観、このようなより大きな問題より風と雲と光と木と友情、そのようなことにもっと苦しんできたかもしれません”（「花園に花が咲く」『空と風と星と詩』）と。

島[*1]の人達は白い森になって山を取り囲んでいるススキ[*2]を畏れていました。ちいさな島のほとんどの人が死んでいたその日[*3]以来、その魂は島を離れられなく、ススキになりいつも島を彷徨っていると信じていました。かつて船に乗って島に帰られなかった人々を懐い、遠い海にはもう一つの島が在り彼らはなんの苦しみのないあの島にいるのだと語っていた島の人々は山に埋められた兄弟たちさえも忘れようとはしなかったのです。

海の向こうには幻像の島イヨド、四間の土にはススキの塊。風と一体になっていつまでも島に付き纏う魂。その島のことをもう1人の友人は”バラムタヌンソム”[*4]とよんでいました。海から帰ってくる風が山のススキを抱え込むときはいつも汗に濡れた濃い、人の匂いがしていました。

かえりみれば 幼友達を
ひとり、ふたり、とみな失い

わたしはなにを願い
ただひとり思いしずむのか？

人生は生きがたいものなのに
詩がこう たやすく書けるのは
恥ずかしいことだ

（尹東柱、同前）

風のないところ、風の匂いがしないところへ行きたかったのです。そして、

寂しいときは
草葉ひとつもいとおしい

空いっぱいスモグのなかに
今も生きている大地

あー
雀ささやき
今も花が咲き

空には
白い雲も流れる

アパートに屈み座り
虚空すこし眺められ

わたしの生
今はよろしい

有り難い
涙ぐむ。

(金芝河「一山詩帳・3」)

と、呟いてみたいです。そしてほんの少しでもいいから、短い線のあるあの手、長い柔らかいあの耳に、堅い横骨のある、いとおしいあの裸足に触りたいと思うのです。他ではないこの空間で。

六畳部屋は他人の国
窓の外に春雨がささやいているが、

灯りをつけて 暗闇を少し追いやり、
時代のように 訪れる朝を待つ最後のわたし、

わたしはわたしに小さな手をさしのべ
涙と慰めで握る最初の握手。

(尹東柱、同前)

そのとき、あなたは傍らにいてわたしを見守ってくれますか。すると、私はどんなに細い静かな風にも身を託し、いつものように眼を閉じると微かな光のような震えが遠くから訪れ、やがてあの震えはヌルイ優しい水になり、わたしの身体の隅々を渡ってもう深い胸の穴にそーっと包み抱いてくれるのでしょうか。

静かにいると
身体に
水が湧く

白い水は 雪になり
空にかかる

……

……

(金芝河「涙」)

ふと気がつく、何処からかあの風が、ススキの森の中に自分の殺した島の人々と一緒に眠っている父の影をのせ吹いてくるのです。

消え去ることの無い
記憶、
痕跡、その塊。

*1 朝鮮半島の南にある島、濟州島。

*2 島全体を包むように島の真ん中にある山、ハンラ山(1980m)には島の人の背より遙かに高い、太いススキの森があり、海から風が吹くと、錆付いた鉄のぶつかる音を出しながら揺れ動く。その風景はまるで巨大な波のようだ。

*3 濟州島4・3事件。濟州島4・3蜂起ともいう。一九四八年四月三日起き、その後六年六カ月も続いた島ぐるみのパルチザン闘争、血みどろの事件である。その3間、「党内の七万五七〇〇戸の家屋のうち一万五二二八戸が焼き払われ、八万六五名が殺傷」されたという記述があるが、4・3事件の真相についてはまだ不確かな部分が多い。ハンラ山の峰々をつたう烽火があがって以来、四七年の歳月が経った。今、その間タブー視されてきたこの事件のことを掘り起こす作業を行っている。(以上、民涛参考)

*4 日本語に訳できないが、あえてすれば「風を敏感にいつも感じるので、ほぼ風と一体になっている島」という意味。

島出身の作家で、自分の作品の生まれる謂われとして4・3事件にこだわりつつある、玄基栄の言葉。

一九九四年